レディアントマイソロジー3 ー暴走の成れの果てー

テイルズオブ俺たち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
レディアントマイソロジー３　ー暴走の成れの果てー

【Ｎコード】
Ｎ６０３７Ｙ

【作者名】
テイルズオブ俺たち

【あらすじ】
この小説は、色んな意味で想像力豊かな作者達の妄想が、やがて暴走を始めることになった作品である？
ご覧になる場合は、覚悟して下され？↑
バトン形式小説なのでこの先どうなるのかは知りませぬ。↑

この小説について

この小説はテイルズオブザワールド　レディアントマイソロジー3の二次創作のリレー小説です。

バトンの順番はこんな感じ（敬省略）
鱗斗→夕影→刀剣士
この三人で回していきます。

ちなみに、バトンを回されるまで、どんな話になるのかは完全極秘、つまりストーリーに関しては話し合いを全くしていないため、マジで終わるまでどんな話になるのかは知りません。
よくわからない話になるかもですがそこんとこよろしく。

ちなみに、紹介やタグの荒ぶりようをみれば分かるように、色々やらかす予定です☆

それでは、話しはこれくらいにして、いよいよリレーが始まります。
見る場合は自己責任で↑

では！

第一話担当・鱗斗

01．少年、憑依、お兄ちゃん。

転生とはーー簡単に言えば、生まれ変わる事。
憑依とはーーこれまた簡単に言えば、霊などが乗り移る事。
ということはつまり、僕が今現在遭遇してしまったこの奇怪で、意味不明なこの状況は、ケータイ小説で大人気の転生、ではなく、憑依、なのだろうか。

つまり、なにを言いたいのかと言うと、僕の今の年齢は十七歳。
なのに、それなのに、この肉体の年齢はーー明らかに小学校低学年レベルのソレだったのだーー。

「ーーどうしてこうなった」
僕はただ今日新しく買ったゲームをしていただけだったのだ。
『テイルズオブザワールド　レディアントマイソロジー3』
僕はそれをやっていた。その途中、突然ウトウトと眠くなってしまい、そのまま眠りに落ち、やがて目を覚ましたら、ここにいた。決して夢オチなんてものじゃない。その証拠に、何度も頬を抓ったり、叩いたりした。まぁ、痛かっただけなのだが。

とにかく、夢でない事は分かった。
ーーしかし、夢でないとしたら。この状況は、一体なんなんだ？

「まさか……」
とんでもないことが、僕の頭の中によぎる。
「僕は、死んだのかーー？」
眠くなったのは、死ぬ寸前だから。

眠ったのは、死んだから。

不意に、ガチャリと扉が開いた。
ちなみに、僕が目覚めた場所は、ベッドが二つある小さな寝室で、僕が眠っていたベッドの隣のベッドのやけに整えられた布団や枕、燭台を見るに、ここはホテルーというよりも、小さな宿屋のようだ。

「どうやら、気がついたようですね」
来客者は、ロックスであった。
……ロックス？って、あれ？
青っぽい色をした毛が、風で少し靡いている。
「あの……」
「本当、心配しましたよ、歩いていたら急にパタリと倒れてしまいましたから……」
どこからどうみても、画面越しでしか見れなかったが、それでもロックスだった。
ということは、つまり。
ここは、レディアントマイソロジー3の舞台・『ルミナシア』の世界、だというのかーー？
「お嬢様ー、キーヤ様がお目覚めになりました？」
「ほんと？」
部屋にまた一人、人が入る。
どうやら僕の名前は、キーヤのようだ。
その人は、綺麗な桃色の髪をしていて、今の僕の肉体年齢よりもすこし小さい、五歳くらいの少女だった。
ロックスのこの呼び方からして、この小さな少女は、マイソロジー3のヒロイン・カノンノであった。
「おはよっ、キーヤお兄ちゃん♪　心配したんだよ～」

お兄ちゃん♪お兄ちゃん、おにいちゃん、おにーちゃん、おにーちゃん……。
僕のなかで、その単語が何度もリピートされた。
カノンノにそう呼ばれるなんて、なるほど、ここが天国か。
今なら、死んでも構わない。
もう死んだんだけどね。

「それでは、キーヤ様もお目覚めになられたので、行きましょうか」
その言葉で、僕は我に帰った。
「うん！ほら、行こっ、キーヤお兄ちゃん♪」
カノンノに腕をグイグイ引っ張られる。
ーー正直、可愛すぎるんだが。

それはそうと、どうやら今までの会話から、僕はロックスとカノンノと共に旅にでていたようだ。
恐らく、両親を失ったカノンノと、仕えるべき人を失ったロックスは、旅の道中で僕をーー僕がこの肉体に入る前のこの肉体の宿主・キーヤを見つけて、一緒に同行させたのだろう。
そして、その道中。この肉体の元の宿主（キーヤ）は倒れてーー死んで、代わりに僕の魂が憑依したのだろう。
あくまで推測なんだけど。

カノンノは未だに僕の腕を引っ張っている。ロックスは宿屋の代金を払う為、先に部屋から出ていったらしい。
僕は、カノンノの頭に手を乗せて、撫でた。
「あっ……」
少しだけ驚いた表情を見せたが、すぐに嬉しそうに笑った。
手を頭から離す。
「む……」

ちょっとだけ不機嫌そうな顔。
手を乗せる。
満足そうな笑顔。

何これ、可愛すぎる。

支払いを終えたロックスが戻ってくるまで、僕はカノンノで遊んでいたのだったーー。

そして、数年後。
僕らは、ギルド『アドリビトム』に加入することになった。
そして、僕らは世界の命運を分けるような、そんな物語の世界に足を踏み入れることになるのだったーー。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

０１．少年、憑依、お兄ちゃん。（後書き）

何となく最初だから暴走しすぎもあれかなー、と思ったので、今回は暴走抑え気味。
正直、カノンノにお兄ちゃんと言わせたかっただけです↑
プロローグ的な感じにしました。

それでは、次回の作者さんはー？

カノンノ「夕影お兄ちゃん？頑張ってね☆」

02．練習、自分、『誓い』と『償い』（前書き）

ども、第二話担当の夕影でございます＋↑

大変遅くなりながら、なんとか第二話完成いたしましたが…うむ、素晴らしい程に内容がペラい↑↑

ギャグる予定だったのに早くも第二話からこんな内容とか……ないわー↑

02．練習、自分、『誓い』と『償い』

――僕が『――――』から『キーヤ・グラスバレー』に変わり、かれこれ数年が経った。

ん……飛ばし過ぎ？…いや、だって特に深い話はなかったし……そうだね……、敢えていうのなら旅の中で、アンジュ達……つまる所、本来の『マイソロ３』のアドリビトムメンバーと出会って、色々あって彼女達に雇われて（当初、主にロックスが）、それでまたそこから色々あって、ギルド『アドリビトム』が出来た事だろうか。

…それで一応話を戻すけど…ギルド『アドリビトム』出来て早二週間が経つんだけど……いまだに一つも依頼は来ていないのだ。

何故か、と言えば当然出て来るので一番始めに出るのは知名度の問題。

一応、ある程度の街にはチラシとか貼ったり配ったりしたけど、まだ出来たばかり故に、何か依頼が来て成功させて評判を上げない限りは、早々依頼は来ないだろう。

……それで、依頼がいまだに来ない現在、僕は何をしているかと言うと……

「――…こう…かな…っ…？」

「――はい。上出来ですよ、キーヤ様」

――……ロックスに魔法を教わってました。

僕が『キーヤ・グラスバレー』として生きる為に幾つか決めた事があるんだけど…その一つが、『ちゃんと戦えるようにする事』である。

この世界が『マイソロ』であって、僕がロックスやカノンノと関係を持っている以上、アドリビトムに加入して、依頼を受ける事はほぼ確定しているに等しいと思った僕は、何があってもちゃんとに戦えるようにしようと考えた。

それで僕は、僕とカノンノがまだ小さい頃、旅をしている中で雇っていた傭兵さんと一緒に戦ってたロックス（今思い出せば、かなり異様な光景だった）に『自分なりの戦い方』を教わり始めたんだけど……僕…というかこの『キーヤ・グラスバレー』は予想以上なもやしっ子だった。

一応至って健康なんだけど、見た目が何でも反射する某片道通行さんばりにもやしで、いざ戦い方を教わりだせば…剣や斧を振るえば少し動いただけで体力がきれるわ、今度は拳を試してみれば一回人形殴っただけで脱臼しかけるわと……接近戦はてんで駄目であった。

その反面、魔法に関してはかなり良いと言えるレベルであった。

ロックスに教わった事もあり、今では初級魔法を無詠唱で発動出来るようになった。
魔法が使えた時はあまりの事に感動しかけたのはよく覚えている。
…それで今現在は上級魔法を覚える事や中級魔法の詠唱時間を縮める事に頑張ってるけど…そう簡単に上手くはいかないみたいである。

「…んー…もうちょっとぐらい詠唱時間を縮めたいんだけど…」

「それはいいかもしれませんが今日はここまでです。これ以上の詠唱短縮練習は、キーヤ様の体に響くかもしれませんから」

「ん…そうだね。ありがとう、ロックス」

僕がそう言って礼をすると、ロックスは『いえいえ』と笑顔で応えた。

今思えば本当、ロックスって凄いよね。
僕に魔法教えたり、カノンノに戦い方教えたり、アンジュにナイフ捌き教えたり、傭兵さんと一緒にガチ戦闘したり……アレ、リアルチートじゃね？

「――お兄ちゃーんっ！！」

「――…ん……？」

ロックスの恐るべき才能に思わず苦笑いしていると、ふと扉が開く音とそんな声が聞こえ振り向くと……。

「――どうしたの、カノン――「どーーんっ！♪」――のぅふっ！！？」

妹であるカノンノが、勢いよく僕のもやしボディに突っ込んできた。死ねる。別に嫌ではないけど僕のもやしボディにとっては肉体ダメージ１０００クラスだろう。

「――ゴフッ…ゴフッ……どうしたの、カノンノ…？」

なんとか耐えきってカノンノを受けきり、僕に突っ込んだままのカノンノに問い掛ける。カノンノは僕の問いににっこりと笑ってみせると…。

「えへへ…お兄ちゃんに会いたくなっちゃって♪」

「ごふぅっ」

カノンノの口から出たその言葉に思わず口からなんか出かけた。
うん、死ねる。言うなれば僕の精神に１００００ダメージだろう。
というか何この妹、超可愛いんですけど。

――凄い今更だけど、僕が『キーヤ・グラスバレー』として生きる為に決めた事の中で、一番重要にしている事がある。

それは…『キーヤ・グラスバレー』として出来るだけ生き続ける事。

僕が憑依する前の『キーヤ・グラスバレー』が一体どんな人間だったのかは僕は分からない。
そして、僕が憑依した原因である死因も。何かの病気だったのかもしれないし、はたまた…憑依してしまった僕が原因かもしれない。

改めて…居なくなってしまった元である『キーヤ・グラスバレー《彼》』の代わりに、今の『キーヤ・グラスバレー《僕》』に出来る事は……妹であるカノンノと、執事であるロックスを悲しませない為に《彼》として《僕》が生き続ける事だ。

――…綺麗事かもしれないし、《彼》の代わりになりきれるかは分からないけど…それが僕に出来る、《彼》に向けての精一杯の『誓

い』であり『償い』だ。
――だから、『キーヤ』…

「――？お兄ちゃん…？」

「ん……何でもないよ」

――《キミ》に応えられるように、僕はカノンノとロックス、そして《キミ》の為に生き続けるよ。

02．練習、自分、『誓い』と『償い』（後書き）

第二話からややシリアスふかせましたが……駄目だな、自分←

改めて合作の難しさを実感致しました；

ギャグる予定だったのにな！……よし、次の人に任せようっ！！（

無茶ぶり←←

ではでは、次回のお話を――

カノンノ「頑張ってね、刀剣士お兄ちゃん♪」

０３．宣伝、依頼、男は狼。（前書き）

はい、第三話担当、刀剣士でございます！
内容は……えぇ……酷いかもっ！
文字数が少ない？
ま、前のお二方に合わせたんですよー……（視線キョトキョト）

03．宣伝、依頼、男は狼。

このところ、様々な場所に『アドリビトム』を宣伝する広告を貼ったり、配ったりするのだが、結果は芳しくない。
僕の魔法の腕前も上達してきてるし、他のみんなの腕前が悪いという訳ではないのだが……。

「――『アドリビトム』をよろしくお願いします」
「お兄ちゃん。ここの分は、全部配っちゃったよ……」
「ん……、そっか……。じゃあ、隣町にいってまた宣伝しようか？」
「うんっ！　お兄ちゃんと一緒なら頑張るよ♪」

そんなことがあってから、僕とカノンノは隣町までの街道を、二人で歩いている。
僕とカノンノでは、やはり歩幅が違うらしく、僕が気を抜いてると、やはりカノンノよりも先に行ってしまう。
そのたび、「待って」と言う声がし、僕が後ろを振り向くと、テテテ……といった走り方で、僕の胸に飛び込んでは、「エヘヘ♪」と笑う。
当初は、さながら弾丸の様な勢いで飛んできていたものだったが、最近は加減を意識しているようだ。

……意識してない時のほうが多いのは、ここだけの秘密だ。

「やっぱり、お兄ちゃんは大好き♪」

……あぁー、可愛すぎるわー。

え、なんですか？　上目遣いとかヤバイんですけど？

……

はっはっはっはっは……。

襲ってしまいたいっ！！

周りを見る。

……誰もいない。

運命の悪戯か、ちょうどいい感じの茂みもある……。

僕は今、狼になるべきなんじゃないのか！？　カ、カノンノもこれは、文句は言わないかもしれない！　決めろ、キーヤ・グラスバレー（仮）！　3、2、1で行くんだ！　行くぞ……。

3……。

2……。

1……！

……

……

……

……

……

……

……待てぇぇぇぇ！

ダメだ！　それはダメだ！　最低、最悪の人間のやることじゃねーか！　いや、もう想像した時点で大馬鹿野郎だ！　しかも、仮にも妹に対して、何しようとしてんだ、僕はぁぁぁ！　落ち着け、落ち着くんだ！　まずは深呼吸だ……。

「スゥー……、ハァー……。スゥー……、ハァー……。」

「キーヤお兄ちゃん？」

「……よし。ごめんカノンノ。僕の頭が、カオスもビックリの思考を展開してた。もう大丈夫だから安心して」

「か、かおす？」

「あ……、その言葉は誰にも言うんじゃ無いぞ？」

もし、この言葉を知っている人がいて（主にロックス）、万が一そこから先程の状況が事細かにばれてしまっては（主に僕の思考回路）、僕の信用は大炎上だ。灰すら残らないだろう……。念には念を入れないと、ダメなのだ。

「隣町が見えてきたな。もう一息だ、カノンノ」

「本当だ！
誰か、依頼主が見つかるといいね！」

「ん、そうだな！」

そう言い、カノンノの頭をポンポンと撫でると、嬉しそうなカノンノの顔をする。それを見ながら、僕は何事も無かったかのように振る舞う。

いや、きっと何も無かったのだ。

何かあったとしたら、それはたぶん僕ではない。うん、きっとそれは僕ではないのだ。

僕はそう考えながら、カノンノに引っ張られ、その町へ入っていった。

やることは先程の町と変わりない。広告を貼付けるのが最初。貼る

のにも許可がいるので、そのたびにお願いするのは、嫌ではないが、なかなか疲れる。それでも……

「♪♪♪～」

鼻唄混じりに、広告を壁に貼っているカノンノを見れば、そんな苦労など、息をすることと同然なのだ。

「私も、もっと頑張らないと……」

独り言の様に呟くカノンノを微笑ましく見ながら、僕も手持ちの広告を貼っていった。

次にやるのは、直接配布。手にとってくれる人と、そうでない人もいるので、こちらも配り終えるのは大変だ。

「『アドリビトム』をよろしくお願いします！」

「どんな依頼でも引き受けます！」

一生懸命言ったのが功を総したのか、予想より早めに配り終えた。とは言っても、太陽は傾き、大地を夕日が赤く染めつつあった。

「今日はここまでにしよう、カノンノ」

「うん、お兄ちゃん。今日、広告を見て、依頼に来る人がいるといいんだけどなぁ……」

「おいおい……。今までが今までなんだ。気長にいこう。そうそう簡単には行かな……」

「あの……すいません……。ギルドの方……ですよね？」

不意に呼ばれた。間違いなく、僕達の事を呼んだ声がした。振り向くと、少し遠慮がちそうな、一人の女性がいた。

「依頼……受けてもらえますか？」

……どうやら、僕達の初仕事は近いようだ。

03．宣伝、依頼、男は狼。（後書き）

はっはー！
最後の方は次話の方に丸投げだぜぇ！
……ごめんなさぁーい！

というわけで……

カノンノ「鱗斗お兄ちゃん……次のお話……お願いしてもいい……かな……？」（ウルウル目、上目遣い）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6037y/

レディアントマイソロジー3 ー暴走の成れの果てー

2011年12月4日01時56分発行